

## 中学校給食、できるか？

### 「センター方式」か、「デリバリー弁当」か、近く結論に

鈴鹿市の中学校での給食をどのようにするか、検討をすすめてきた「鈴鹿市中学校給食検討委員会」は、11月の第10回委員会で「センター方式」と「デリバリー方式」にしぼって、来年の次回委員会には方向を決めることとなりました。各校に給食室をつくる「自校方式」は、検討から外れました。

**センター方式**は、給食センターで調理して各学校に配送するもので、小学校と同じやり方です。生徒全員が同じ献立の給食を食べます。

試算では、中学生6700人分をまかなうセンターの建設費が16億8千万円、年間経費が2億3千万円ほどになります。

**デリバリー方式**は、民間業者が作った弁当を各学校に配送しますが、希望する生徒が注文する方式で、生徒は自宅からの弁当などと「選択」することになります。デリバリー方式を始めた亀山市や四日市市の「喫食率」は30%ほどです。年間経費は喫食率が上がると高くなり、30%で1億6千万円、50%で2億5千万円、70%では3億3千万円になります。

### 安心、経費、どう考えても「センター」が良い

デリバリー弁当を作る業者は市内にはなく、遠い所から運ぶこととなります。半数以上の生徒が食べれば、全員が食べるセンター方式よりも費用が上回ります。「地産地消」「食育」もできません。何よりも、教育としての学校給食になりません。小学校のようにみんなで食べる、温かくておいしい給食を、と願う市民の希望に沿った結論を出してほしいものです。

# 学校給食へ鈴鹿産食材の利用を

「鈴鹿の農林水産業を考える議員の会」は、市会議員18人が参加し、私や森川さんもメンバーです。農業、漁業関係者などから話を聞いたり、学習会を開いたりと活動をしてきました。その中で、鈴鹿で生産する食材の安定した市場として、学校給食があるのではないかと調べてみました。

意外なことに、学校給食に使っている野菜のうち、鈴鹿産の割合は低くて26.3%しかないことが分かりました。年間の購入費5700万円のうち鈴鹿産が1500万円、あとはよその食材を買っているのです。

## 超党派「議員の会」が市長と教育長に「提言」

そこで「議員の会」は11月24日、川岸市長と水井教育長に「学校給食へ鈴鹿産食材の利用を推進する提言」を行ないました。提言は以下の2点です。

1. 産業振興部と教育委員会が連携し、野菜を中心とする鈴鹿産の食材を学校給食へ提供できるシステムを構築すること。
2. 「食育」を学校教育はもとより広く市民に理解と実践を広め、地産地消の更なる推進を図ること。

議会の過半数の議員の意見ということでもあり、市長も教育長もさっそく検討することを約束しました。

---

## 失業、不況うけて生活保護費が急増

12月補正予算で、生活保護の扶助費が5億円も増額となりました。当初予算から3割もアップとなりますが、生活保護世帯が昨年より323世帯571人ふえて994世帯1551人になり、これからも増加の見込みです。

中でも「派遣切り」などによるものが153世帯と、働きたくても働けない人が急増していることがはっきりしています。今年は私たちの生活相談にも、ひっきりなしに失業、住居、生活苦の問題を抱えた人たちがやってきています。こんなことは、20年以上議員活動をしていて初めてです。年末をむかえて、寒空に行き場のない人たちが去年以上に出るのではないかと心配です。

生活保護の担当部署も11人だったケースワーカーが4月から13人、10月からは15人と強化されてはいますが、それを上回る相談、申請があります。市民が頼りにする「最後のセーフティネット」、連日フル回転です。

# プラスチックごみ分別方法が変わる

不燃物リサイクルセンターの新プラント完成に合わせて、来年4月（一部地域は2月）からプラスチックごみの収集方法が変わります。これまでは、柔らかいプラスチックはピンクの袋、硬いプラスチックは「不燃物」の袋で出していました。10年間、市民も慣れ親しんだやり方ですが、来年からは、「容器包装」プラスチックと「その他」のプラスチックという分け方になります。

## 「容器包装」であるか、ないか、が分ける基準

「容器包装」とは、商品を入れたり包んだりしているもので、「プラ」マークが印刷されています。「プラ」マークがあれば、硬くても柔らかくてもプラスチックごみで出します。

一方、「プラ」マークが付いていないものは「もやせないごみ」で出します。また、「プラ」でも汚れたものは「もやせるごみ」に出さねばなりません。この辺が、ややこしい所です。

「プラマークが無くても、きれいなプラスチックなら入れても支障ないではないか」と聞くと、「処理に支障はないが、分け方としてはダメ」との返事。なぜなら、「プラマークの付いたものは、その会社がリサイクルの費用を負担しているから」です。このあたりの事情を市民がきちんと理解しないと、ごみを出すたびに混乱します。市はていねいに分かりやすく説明をしなければなりません。

---

## 一般質問時間の「片道方式」を試行

12月議会では、一般質問の方法が少し変わりました。各議員の持ち時間を「片道方式」にしたのです。これまでは議員の質問と市側の答弁の両方をカウントしていたのを、議員の質問時間のみをカウントする方法です。

この方式のいい所は、市側の答弁が少々長くても議員の質問時間がへらないうことです。議論の最後の「詰め」の段階で、答弁を長々とされて時間切れ、「もう一声」が出来ずに終わる場面がよくありましたが、そんな欠点が解決されます。今回私は持ち時間45分のうち、保障された質問時間「23分」を自分のペースで使うことが出来ました。「往復」では5分オーバーでした。

ずいそう



## 山田洋次の「おとうと」

今年は見ごたえのある映画が多く上映され、私も楽しませてもらった。この欄で感想を書いたものは「おくりびと」「レッドクリフ」「グラントリノ」「60歳のラブレター」「沈まぬ太陽」。他にも「怪人二十面相」「劔岳点の記」「炎天の城」「風が強く吹いている」なども良かった。

さて、来年は1月末に山田洋次監督の「おとうと」が上映となるのが、今から楽しみである。先日、映画が待ちきれずに、脚本を小説にした本を買って読んだので、予告編として紹介したい。

### どこにもありそうな「家族という厄介な絆」

山田洋次はこの本の帯に書いている。「寅さんシリーズが、愚かな兄と賢い妹の滑稽譚だったとすれば、こんどの『おとうと』は、賢い姉と愚かな弟の、可笑しくて哀しい物語である。」

姉（吉永小百合）は東京で夫亡きあとの薬局を守って、堅実に生きているが、その一人娘の大事な結婚式の日に見われたのが、大阪からやってきた、何もかも姉と正反対の弟（笑福亭鶴瓶）であった。案の定、呑み助で非常識な弟は結婚式を台無しにして、一同のひんしゆくを買う。

その後も弟は、姉に借金の尻拭いをしてもらい、大げんかして絶縁状態となるが、何年か後に弟が重病で倒れたとの連絡が入る・・・。

「お前ら、正しくて健全な人間や。せやからわいみたいにどもならんごんたくれの、惨めな気持ちなんかわからへんのやろ。・・・さいなら。」縁を切られた弟の、別れ際のセリフが、心に残る。

私もいろんな人の生活相談の中で、この物語と同じような人生を、たくさん見てきた。葬式もいくつかしたが、身寄りの無い人かと思っていたら、葬式とか最後の場面になると親族が出てくるのである。そして、みんなに迷惑かけてダメなやつだったけど、いいところもあったんだよ、と振り返る。まさに山田洋次のいう「家族という厄介な絆」である。

私たちは生まれてから死ぬまで、多くの人に迷惑をかけ、迷惑をかけられる。厄介な人と付き合わされる。しかし、もし迷惑も厄介もない、デコボコも無い平らな人生だったら、そんな人生、面白くないだろうなと思う。